実践女子大学 実践女子大学短期大学部

NO.17
2021年07月

下田歌子記念女性総合研究所

News letter

Contents

02 Column 01
大学という不思議な空間
実践女子大学・実践女子大学短期大学部 学長 難波 雅紀

03 Column 02
英国教育制度雑記 兼務研究員 清田 夏代

04 Column 03
下田歌子と津田梅子 ―明治期女子教育の二人のパイオニア
西九州大学名誉教授、津田塾大学言語文化研究所特任研究員 香川 せつ子

06 Column 04
下田歌子と宗田覺 兼務研究員 大川 知子

07 下田歌子ヒストリア 所長 広井 多鶴子

08 実践女子大学 下田歌子記念女性総合研究所
2021年度 研究員一覧
今年度の活動

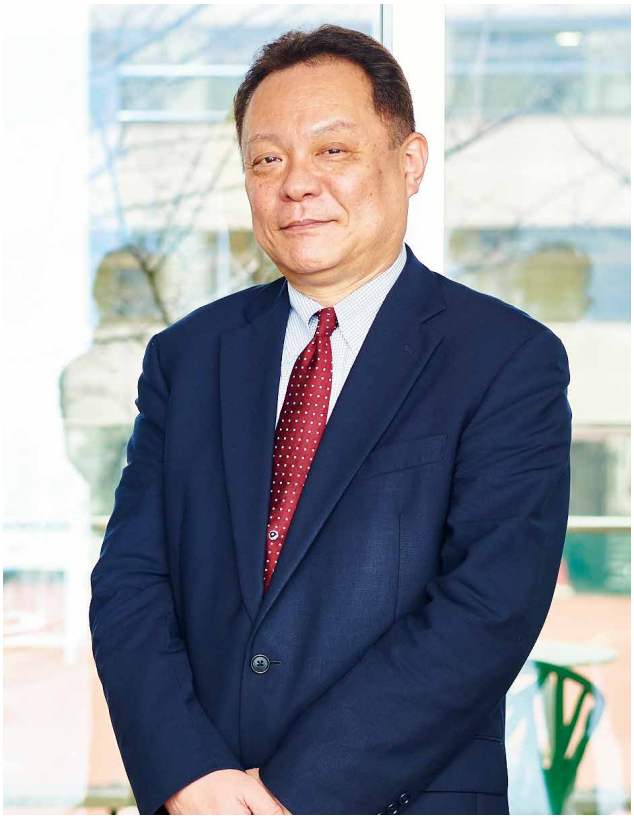
Column 01

大学という不思議な空間

実践女子大学・実践女子大学短期大学部 学長　難波 雅紀

ニューハンプシャー州は、アメリカ合衆国北東部のニューイングランド地方にある、広大な自然に恵まれた小さな州だ。北でカナダのケベック州、東でメイン州と大西洋、南でマサチューセッツ州、西でバーモント州に隣接している。そのニューハンプシャー州の西の外れに、ハノーヴァーという町がある。たとえば、マサチューセッツ州ボストンから車で行くとすれば、インターステイトの93号線を北上し、途中で89号線に移って北西に進んでいくと、2時間半ぐらいでそこに着く。ハノーヴァーは、荒野の中にぽつんと佇む、小さくて瀟洒な町だ。その町に私はかつて暮らしたことがある。

ハノーヴァーという名がよく知られているのは、アイヴィーリーグの名門のひとつ、ダートマス大学（Dartmouth College）が所在する地だからだ。ダートマス大学は、1769年にピューリタンの聖職者だったエリアザル・ウィーロック（Rev. Eleazar Wheelock）が設立した、アメリカ植民地時代に建てられた最後の大学で、アメリカで9番目に古いという歴史をもっている。「インディアン諸部族の若者への教育と教化」（“the education and instruction of Youth of the Indian Tribes”）、すなわちキリスト教宣教をミッションにしていて、そのことは、現代でも校章のロゴにはっきり刻み込まれている。また、ダートマス大学には、ラテン語で“Vox clamantis in deserto”、英語にすれば“a voice crying out in the wilderness”というモットーがある。「荒野にこだます雄叫び」という意味だ。「雄叫び」をキリストの教えと読み替えれば、このモットーは大学のミッションを生き生きと伝えている。そして、私はかつてそこで学んだことがある。



当時、私は客員研究員だったが、とても幸運なことに、図書館にある3畳ぐらいの小さな部屋を研究室としてもらっていた。だから、部屋を出てちょっと歩けば、つんと鼻を突く例の匂いがする中、何万という本が整然と並んでいる書庫に行くことができた。書庫は、初期アメリカの歴史書やキリスト教の書物で溢れていた。ニューイングランド・ピューリタニズムという宗教思想を研究する私にとって、それは巨大な宝箱だった。私は研究室と書庫とを幾度も行き来しつつ、新約聖書「ヨハネの黙示録」をひたすら読んだ。千年王国、キリストの再臨、アルマゲドンの戦い、最後の審判、神の国の到来。ヨハネの預言は何とも難解だ。それは巧妙なパズルや謎掛けの連続で、幾つもの注解に頼らなければ読み解くのは難しい。でも、パズルや謎掛けに答えるのはゲームのようなものだから、読み解くことには妙な楽しさがある。私はその楽しさに興奮し、我を忘れていった。

日本に戻ってから、私は、旧約預言の新約での成就という脈絡で、アメリカの国家的アイデンティティの意味を論じてきた。仮に、「ヨハネの黙示録」に没頭することがなかったとしたら、今の私はどうなっていただろうか。考えるとぞっとしてくる。本学もそうだが、本来、大学とは、学び、究める者にとって、決定的な何かを秘めた不思議な空間なのだと私は思う。

（なんば まさのり　英文学科 教授）

Column 02

英国教育制度雑記

兼務研究員　清田 夏代

教育行政学という分野で、主に英国を教育ガバナンスを中心に研究活動を行っております。教育制度の観点から見るならば、英国は極めて特異な国であるといえます（どの国の教育制度も、固有の文化的社会的背景の中で独自の進化をしてきたという意味ではそれぞれが唯一無二であるともいえるのですが）。その特異性を端的に知ることができる例として、国民教育の成立年をみるならば、英国で基礎教育法が成立するのは 1870 年です。対し、日本で学制が発布され、身分性別にかかわらず「邑に不学の戸なく家に不学の人なからしめん」ことを目指すことが宣言されたのが 1972 年でした。後者は五年前にようやく近代化への道を踏み出したばかりの後進国、片や前者は列強と呼ばれた当時の欧米先進諸国の中でもいち早く産業革命を実現し、政治的経済的に強大な力を維持していた筆頭国、この二国の国民教育法令の成立にわずか二年の開きしかないということは極めて特異なことと思われます。実際、18 世紀のヨーロッパの勢力図において決して優勢ではなかったプロイセン王国で国民に対する基礎教育制度が成立したのが 1763 年のことですから、それと比べても百年以上後のことになります。

しかし、国民教育制度の成立が遅かったということが、英国に教育機関がなかったことを意味するわけではありません。英国では国家統制への忌避感や当時の社会状況

ウィンザー城

に基づく人々の意識が公教育制度の成立を遅らせることになりましたが、英国人の「ボランタリズム」の精神は、教会や資本家、慈善家等による多種多様な教育機関を形成してきました。こうして現在の英国の公立セクターにおいても、助成金と自律性の関係などにおいて多様な学校形態が存在しています。また、公立学校でも日本とは異なり、学校ごとの教員採用人事、予算執行が基本形となっていることなど、個々の学校の裁量が極めて多いことが特徴です。

社会的歴史的な背景の違いがもたらしてきたそれぞれの国の固有の公教育制度原理を解明すること、教育制度の比較研究の面白さとは、そうしたところにあるのではないかと考えます。英国の教育制度は日本と比較して、よくいえば柔軟（悪くいえば…）なおかつ教育制度も政治の影響をもろかぶりするような国であるため、政権交代の際には信じられないような大胆な変革がなされることもあります。そうなりますとフォローが大変なので、総選挙の際には政権交代が起こらないことをひたすら祈るのですが、政権交代がなくともいきなり省庁が改組されたり、学校カテゴリーが廃止されたりするため、本当に目が離せません（少し目を離すと、教育相が代わっていたりします）。昨年来の感染症の影響で英国に行く機会が遠のいておりますが、EU 離脱などの出来事もあり、ますます今後の状況が気になるところです。

（せいだ なつよ　教職センター 教授）

Column 03

下田歌子と津田梅子
― 明治期女子教育の二人のパイオニア

西九州大学名誉教授、津田塾大学言語文化研究所特任研究員　香川 せつ子

私は、研究叢書『下田歌子と近代日本―良妻賢母と女子教育の創出』で、下田歌子と津田梅子について執筆しました。イギリス女子教育史を専門としてきた私が、下田のイギリス留学について知ったのは数年前、実践女子大学の大関啓子教授の論文からです。また津田梅子といえばアメリカ留学が有名ですが、イギリスにも半年間留学をしています。二人の渡英は1890年代、その頃のイギリスの女子教育は彼女たちの眼にどう映ったのだろうかと興味を抱いていた折に、縁あって執筆の機会を頂きました。二人の旅を追跡するなかで改めて感じたことは、パイオニアとしての強い意志としなやかな思考です。

下田歌子と津田梅子の出会い

明治を代表する女子教育家である下田と津田は、「良妻賢母主義の保守的教育者」対「西洋流の進歩的教育者」という構図で理解されがちでした。しかし、二人は学問と教育に対する真摯な姿勢を共有し、生育環境や思想を超えた信頼関係で結ばれていました。大庭みな子著『津田梅子』（朝日文庫）には、津田が伊藤博文を介して桃夭学校で教えるようになった経緯が、様々なエピソードを交えて描かれています。和歌・国学に秀でた下田と、英語と西洋文化に精通する津田は、伊藤が推進する宮中改革と女子教育の近代化に必要な逸材でした。

津田がアメリカの母ランマン夫人に宛てた私信（The Attic Letters）でMrs. Shimodaは頻繁に登場し、そこから下田に対する敬慕が窺えます。日本の女性の地位の低さに失望し、留学の成果を活かす場もなく苦悩していた20歳の津田にとって、桃夭学校を取り仕切る十歳年長の下田の存在は希望の光と映ったのでしょう。「下田先生は素晴らしい女性で、皇后様からも信頼されています」、「上品で洗練された教養豊かな女性です」と称賛しています。華族女学校勤務後も、宮廷の風習や慣行に溶け込めない津田は何かにつけ下田を頼りにしており、その関係は、津田が女子英学塾設立のために華族女学校を辞職する1900年まで続きました。

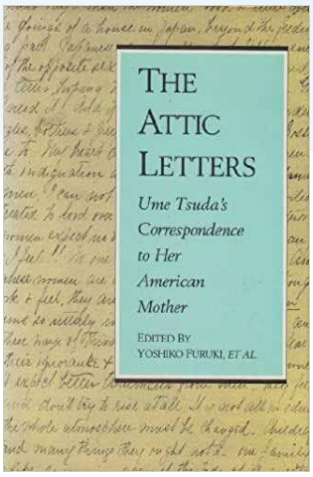
津田梅子
桃夭学校で教え始めた頃
資料提供：津田塾大学デジタルアーカイブ

下田歌子
桃夭学校時代
資料提供：実践女子大学図書館

筆者
オックスフォード大学、
セントヒルダズ・カレッジの庭で撮影

下田と津田のイギリス留学経験

下田は1893年から2年間欧米に留学し、津田は1898



The Attic Letters: Ume Tsuda's Correspondence to Her American Mother,1991.

年秋に渡英します。二人はそれぞれにオックスフォード大学とケンブリッジ大学の女性カレッジやトレーニング・カレッジ、当時の名門女子校を訪問しました。なかでもチェルトナム・レディーズ・カレッジの校長ドロシア・ビールは二人にとって印象深い女性でした。下田は「この女博士の徳望、甚だいみじきも宜なり。其容貌態度極めて温厚、謹格にして、其客を愛する親切懇篤至らざる所なし」とその人格に傾倒し、津田は「ビール校長が小さな始まりを大きな学校へと成長させた」ことに勇気をもらい、ビールが創立したオックスフォード大学のセントヒルダズ・カレッジで２か月間聴講生として過ごしました。

二人のイギリス女子教育視察の内容は、むしろ対照的です。津田は、招待主である英国教会やオックスフォード女性カレッジの学寮長が準備した日程に従い、短期間に著名な知識人、大学人、女性教育者と面会しました。他方、「皇女教育視察」のミッションを担った下田は半ば手探りで、上流階級の家庭教育を知ることから始めました。寄寓先となった知日派女性ゴードン夫人の助けを得て、上流中流家庭を訪問し、日々の生活や教育のありさまを具に観察しています。『泰西婦女風俗』や『泰西所見家庭教育』を読むと、イギリスと日本を対比し、その良し悪しを考えていたことが伝わります。

「良妻賢母」とヴィクトリアン・ファミリー

下田と津田の足跡を辿るなかで私の興味を惹いたのは、ヴィクトリアン・ファミリーの影響です。下田は、イギリスの中流家庭では「妻と夫が友だちのよう」であり、妻が家政や子の教育の責任を担うことに驚きました。日本では夫と妻は主従の関係にあり、嫁は舅姑に仕えるとされていたからです。西洋文明国家の基礎が、家庭をつかさどる女性の知力にあると察知した下田は、帰国後「良妻賢母」の養成を女子教育の目標に掲げます。そのねらいは、女性を封建的家族制度から解放し、家庭を治める

ドロシア・ビール
出　典：Elizabeth Raikes, Dorothea Beale of Cheltenham, London; Archibald Constable and Company LTD., 1908.

チェルトナム・レディーズ・カレッジ（1908 年）
出　典：Elizabeth Raikes, Dorothea Beale of Cheltenham, London; Archibald Constable and Company LTD., 1908.

「主婦」に相応しい能力を養うことでした。津田梅子もまたアメリカのヴィクトリアン・ファミリーを理想とし、日本の家族制度や女性の従属的地位に憤慨しました。津田は「良妻賢母」の規範を肯定しつつも、良妻賢母主義教育は女性を家庭に閉じ込めると批判し、女性の社会的自立を促す高等教育を標榜します。

津田が西洋モデルの家族と教育を日本に移植することを試みたのに対し、下田は西洋モデルを日本の伝統社会に適用させる術（すべ）を模索したともいえるでしょう。下田は、儒教道徳や国家主義の固定的枠組みに固執することなく、女性の視点から、西洋文化の長所を柔軟に取り入れる懐の深さと先進性をもっていたのです。　（かがわ せつこ）

Column 04

下田歌子と宗田覺

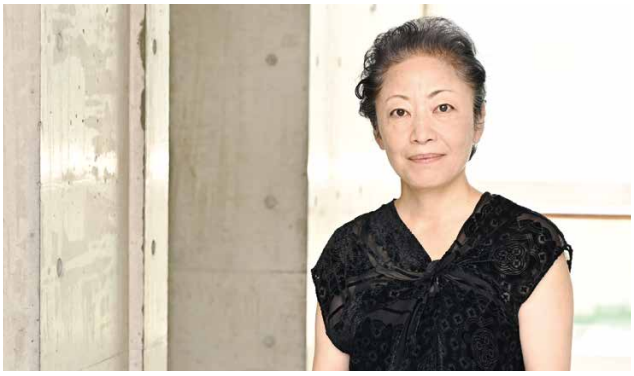
兼務研究員　大川 知子

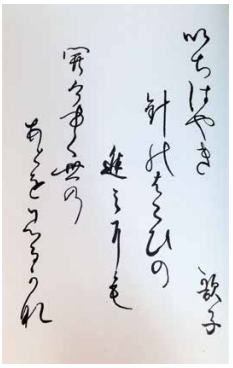
毎年授業の一環として、見学させていただいている東京農工大学科学博物館のミシン展示コーナーで、長くボランティアとして従事されていた小林成夫さんから教えていただいた、下田歌子が詠んだ歌の情報提供を、ニュースレターNo.3から呼び掛けた。その後、6年が経過したものの、梨の礫。自分で調べてみることにした。

この歌が掲載されていたのは、1921年に出版された宗田覺著『裁縫ミシン全書―誰にでも出来る子供洋服の図解と縫方』の巻頭である。表紙には、「文部省認定」との記載があり、題字は徳富蘇峰である。宗田覺は、1916年からシンガーミシン（Singer Manufacturing Co.）が運営した「シンガー裁縫院」の主事を務めていた（池田2015）。

下田と宗田の接点を探ろうと国会図書館に出向いたが、宗田に関する情報は皆無に等しく、唯一下田と宗田の記事が収められた1921年の雑誌『婦人界』2月号に辿り着いた。「職業婦人の成功の秘訣」（下田 p.11）、「家庭副業として有望なるミシン裁縫」（宗田 p.40）がそれである。下田の記事は、心無い人が切り取ったようで、読むことが叶わなかったが、タイトルを見る限りにおいて、両者に、働く女性を推進しようとする志向の重なりが見て取れる。

「現今日本婦人ノ情態ハ実ニ気ノ毒と云フノ外ナシ。（中略）若シ日本ノ婦人ニシテ「シンガー」ノ裁縫器ヲ日本へ紹介スルハ獨リ會社ノ利益ナルノミナラズ、日本物質文明ノ為ニ貢献スル所少カラザルベシ」とのヴィジョンを掲げ（ゴードン 2013）、世界で初めてミシンの量産化に成功した、この米国シンガーミシンの販売店が、1900年、





左：『裁縫ミシン全書』　右：下田先生直筆の歌

極東の日本に開店した。

宗田が籍を置いた「シンガー裁縫院」は、シンガーミシンの営業販売に携わる人材養成機関の役割を果たした。宗田は、この本の中で、合理的な機械を如何に取り入れるかが、理想の国家に近付く最善の方法であり、元来器用な日本人であれば、一旦技術を体得した暁には、外国さえも凌駕することは容易だとも述べている（下線筆者）。

下田もまた、著書『家政学』上巻の中の「裁縫」において、「裁縫が上手いことは家事経済に貢献する」と指摘し、雑誌『婦人界』（1902年）でも、「女子が一人でも自活の路が得られるやうになることは実に無言の間に女子の力を強めまして、女子の程度を高めると云うことに至つては以上なる益があると思ひますから、私はどうぞ理論よりも先づ女子の実力を養ひまして、さうして自活の路を立させると云ふことに付いて充分力を尽くしたいと思ひます」（下線筆者）と述べている（三好 2012）。

いち早き針の運びの進みにも
開けゆく世のあとを見るかな

下田にとって、裁縫を始めとする「手芸」は、女性が自らの手で「実利実益主義」を体現するものであり（山崎 2004）、この歌には、文明の利器としてのミシンが、女性たちを自立した明るい未来に導くという期待が込められている。　（おおかわ ともこ　生活科学研究科 准教授）

[参考文献]
アンドルー・ゴードン『ミシンと日本の近代―消費者の創出』みすず書房、2013年、p.35.
池田仁美「メディアに見るシンガーミシン裁縫女学院の沿革とミシン裁縫教育」『デザイン理論』意匠学会、66号、2015年、pp.3、8.
下田歌子『家政学 上』博文館、1893年、p.49.
三好信浩『日本女子産業教育史の研究』風間書房、2012年、pp.88-89.
山崎明子「下田歌子の社会構想と『手芸』」『女性学』日本女性学会学会誌、Vol.12、2004年、p.48.

下田歌子ヒストリア 1

これまであまり触れられることがなかった下田歌子とその周辺に関する歴史秘話（エピソード）をお伝えします。
そこには知られざる「人間・下田歌子」の姿があります。

吉屋信子と下田歌子

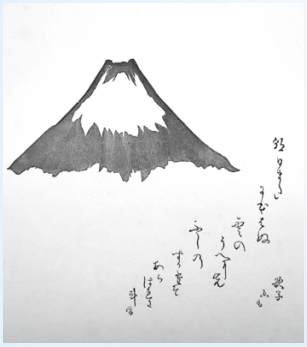
研究所所長　広井 多鶴子

大きくなったら下田歌子になる

戦前、少女小説で人気を集めた吉屋信子（よしやのぶこ　1896-1973）は、1953 年、『婦人公論』の連載記事「物語人物女性史」で下田歌子の評伝を書いています。その「追記」で、吉屋は幼少期、「大きくなったら下田歌子になるの」と話していたというエピソードを紹介しています。吉屋が小学校に入る前から、父母はいつも下田がいかにすぐれた女性かを話して聞かせ、家には下田の短冊や扇子や本が置かれていたといいます。1900 年代の前半、明治の終わり頃のことでしょう。

吉屋が女性作家の集まりで、下田の評伝を書くと話したところ、森田たま（1894-1970）が、「私は子供の頃、大きくなったら下田歌子になるって言ってたのよ」と話すのでびっくりしたといいます。吉屋はそれを聞いて、「ああやっぱり…そんなにその名は力強くあの時代の各家庭に浸透されていたのかと今更の感だった」と記しています。今のようなアイドルがいなかった明治時代、下田が幼い女の子のあこがれだったとは。

小山いと子（1901-1989）は、「大きくなったら…」というようなことを言った記憶はないということですが、家には下田の短冊や色紙の複製があり、父母がしょっちゅう下田のことを話題にしていたと書いています。母は、幼い小山に下田の「春月」の和歌をそらんじさせたのだとか（「下田歌子」円地文子監修『人物日本の女性史 12』1978 年）。



富士山（賛「朝日また」歌）の色紙
（実践女子大学図書館蔵）

吉屋信子肖像
（鎌倉大仏高徳院殿HP）

1900（明治33）年4月、帝国婦人協会新潟支会が設立された時の写真。
下田は最前列中央。（実践女子大学図書館蔵）

下田の信越紀行と吉屋の父

実は、「地方官吏」だった吉屋の父は、下田と親しく会ったことがあり、そのことを吉屋に自慢していたということです。下田は帝国婦人協会を発足させた翌 1899（明治 32）年 8 月、約 1 ヶ月にわたって、長野と新潟に遊説に出かけ、その行程を「信越紀行」としてまとめています（『下田歌子著作集　香雪叢書』第 1 巻、1932 年、所収）。

吉屋は、下田の紀行文の中に「はからずも亡き父の名を見出して私はいっとき感傷にさへ打たれた」と書いているのですが、「信越紀行」には、「かねて本会の事に志厚き吉屋郡長は、なほ蓮野にとて諸共に出でたゝる」という一文があります（384 頁）。下田は 8 月 31 日に新発田町（現新発田市）から蓮野村（現聖籠（せいろう）町）に向かうのですが、その際、当時、北蒲原郡の郡長を務めていた吉屋の父も同行したということのようです。

この信越紀行で、下田は上田、長野、高田、直江津、長岡、新発田、三条、柏崎など、各地をまわり、講演をし、多くの人々と懇談し、学校など様々な箇所を見学しました。どこでも大変な歓迎ぶりで、9 月 3 日に三条で行った講演会について下田は、「聴衆あまりに多くて声も通ほらず。人はいふ、四千にもこえたりと」と書いています。テレビのない時代、こうした活動によって、下田の名声が全国に浸透していったのでしょう。

（ひろい たづこ　人間社会学部 教授）

2021年度 実践女子大学 下田歌子記念女性総合研究所 研究員一覧

広井多鶴子（所長）
久保　貴子（専任研究員）
深澤　晶久（兼務研究員・国文学科 教授）
志渡岡理恵（兼務研究員・英文学科 教授）
村上まどか（兼務研究員・英文学科 教授）
織田　涼子（兼務研究員・美学美術史学科 准教授）
数野千恵子（兼務研究員・食生活科学科 教授）
大川　知子（兼務研究員・生活環境学科 准教授）
髙橋　桂子（兼務研究員・生活文化学科 教授）
細江　容子（兼務研究員・生活文化学科 教授）
松田　純子（兼務研究員・生活文化学科 教授）
須賀由紀子（兼務研究員・現代生活学科 教授）
清田　夏代（兼務研究員・大学教職センター 教授）
駒谷　真美（兼務研究員・人間社会学科 教授）
神木まなみ（兼務研究員・人間社会学部 助手）
牛膓ヒロミ（客員研究員・実践女子大学 名誉教授）
小林　　修（客員研究員・短期大学部 名誉教授）
関　登美子（客員研究員・実践女子大学 非常勤講師）
愛甲　晴美（客員研究員・福生市郷土資料室）
加藤　靖子（客員研究員・東京大学大学院 教育学研究科 特任研究員）
鈴木　隆一（客員研究員・実践女子学園岩村親善大使）
若森　慶隆（客員研究員・ＮＰＯ法人いわむら一斎塾）

今年度の活動

■ 研究所「年報」第8号の発行（2022年3月）

実践女子学園の教職員であれば、どなたでも投稿できます。

申込締め切り：2021年　9月20日（月）
原稿締め切り：2021年 11月30日（火）

■ 常磐祭

実践女子学園校歌のいろいろ（ミニコンサート）
渋谷キャンパス　2021年10月9日（土）、10日（日）

学園資料の展示
日野キャンパス　2021年11月13日（土）、14日（日）

■ 嚶鳴広場特別展示（協力事業）

明治三十六年の「活人画」～山本芳翠と下田歌子～
2021年6月26日（土）～7月28日（水）
愛知県東海市／芸術劇場・嚶鳴広場

■「第19回 下田歌子賞」表彰式（協力事業）

2022年1月22日（土）
岐阜県恵那市岩村町

『研究所叢書第１巻 下田歌子と近代日本―良妻賢母論と女子教育の創出』（勁草書房）がまもなく刊行されます。それを記念して、11月27日（土）にシンポジウムを開催する予定です。（渋谷キャンパス 403 教室）
詳しくは本研究所HPをご覧ください。

https://www.jissen.ac.jp/shimoda/index.html

『ニューズレター』No. 17
発行：2021年７月29日　編集・発行所：実践女子大学 下田歌子記念女性総合研究所
〒191-8510　東京都日野市大坂上４-1-1　電話・FAX：042-585-8945　E-mail：shimoda-ins@jissen.ac.jp